

1. 福岡城の構え

福岡城下の橋^{しも}大手御門

「^お大手御門」という言葉の意味には2通りある。一つは「追手ゆく門」、敵を追っかけて、城門を一杯に開け広げて追討する門という意味で、寸描(6)で紹介した櫓形門がこれに当たる。もう一つは、お殿様の御前にあるという意味で、「上の橋大手御門」(寸描8)と「下の橋大手御門」がこれに当たる。

^{しも}下の入り口「下の橋大手御門」は、殿様が生活するお館への出入口であり、国表の奥方様のお里帰りやお城に仕えるお女中さん達の出入口でもあった。奥方様の安産祈願の折りは、お犬様を先頭に行列を仕立てて、塗り籠に揺られながらこの御門を出入りした。

城門の姿は、戦後、福岡市の発展と共に変更が加えられた。2000年8月不審火で半焼したが、2008年11月、美しい二層の城門として復元された。焼失前は平屋造りだったが、現在の姿が幕末までの本来の姿だと言われている。

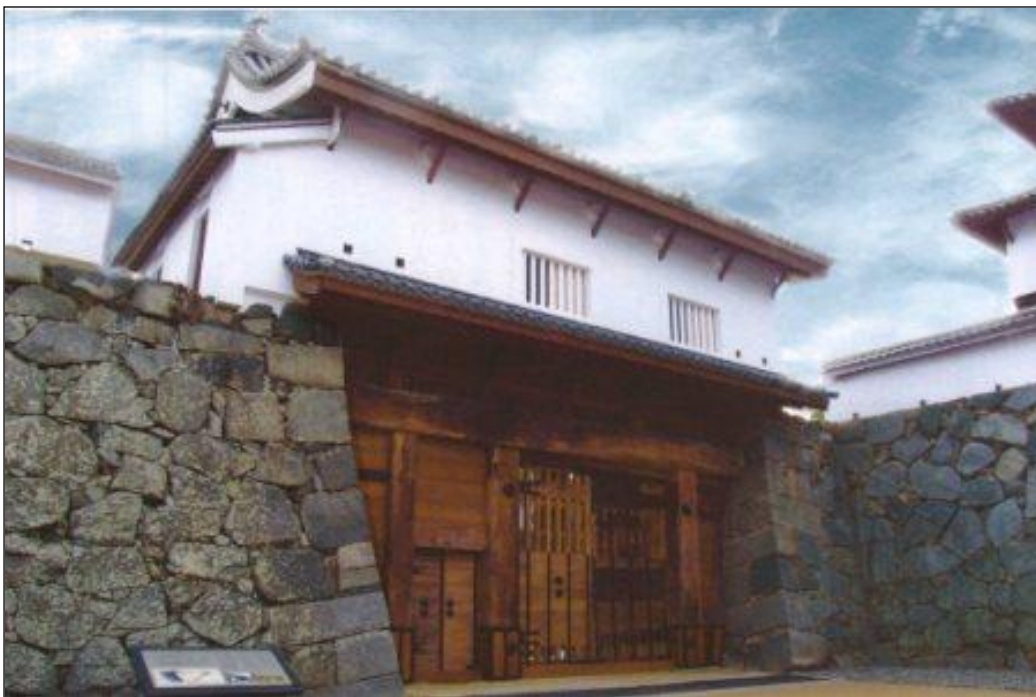
開門行事では、大筒の祝砲が轟くなか、御神幸行列がゆっくりと門をくぐり、鎧兜に身を包んだ「黒田24騎」の子孫達が勝ち鬨をあげた。



焼失前の「下の橋大手御門」



「下の橋大手御門」火災現場写真(写真提供:読売新聞)



復元後の「下の橋大手御門」(写真提供:福岡市教育委員会)